

<オンライン教学講座「報恩抄」④ 参考資料>

◎顕仏未来記

彼の像法の末とこの末法の初めとは、全く同じ。

(御書新版 609 ページ・御書全集 507 ページ)

◎代表幹部研修会（2005年8月16日）でのスピーチ

大聖人の御生涯は、釈尊の在世とは比較にならないほどの大難の連続であられた。

しかし、こうした大難と闘うことで、釈尊の予言が虚妄でないことを、現実証明された。そして、一切の難に打ち勝ち、末法の御本仏としての境涯を厳然と顕されたのである。打ち続く弾圧のなかで、大聖人の門下には、退転する者も出た。退転してしまえば、それまで積んできた功德も、すべて消え去ってしまう。

大切なことは、絶対に退転しないことだ。広宣流布の歩みを止めないことだ。信心を貫いてこそ、何ものにも崩されない、最高の幸福境涯を築くことができるのである。

(『池田大作全集』第99巻88ページ)

◎勝利の経典「御書」に学ぶ 椎地四郎殿御書

大聖人の御在世当時、世間でも法華経を信じる者たちは少なからずいました。しかし彼らは、ただ自らの功德を求めて講義を聴いたり、写経をしたりするだけにすぎませんでした。それは、「困難な時代に、命懸けで迷い悩める人を、一人残らず断じて救う」という仏の真意とは、かけ離れた法華経観であったのです。

この当時の法華経観を敢然と打ち破られたのが、大聖人の死身弘法の「行者」としての大闘争であられました。

創価の父・牧口先生が「信者」と「行者」を厳格に立て分けられていたことも有名です。牧口先生は師子吼されました。

「魔が起こるか起こらないかで信者と行者の区別がわかるではないか」

すなわち、自分だけの利益を願い、三障四魔との戦いのない者は、ただの「信者」にすぎないと喝破されました。広宣流布のために菩薩行に励み、三障四魔と戦っていく人こそ、真の「行者」であると教えられたのです。

このご精神の通りに、「行者」としての実践を貫いてきたのが創価三代の師弟であり、誉れの学会員の皆さま方にほかなりません。ゆえに学会の前進に、三障四魔や三類の強敵が競い起こることは必然です。そしてまた、学会員の一人ひとりが「法華経の行者」であるからこそ、学会は幾多の難を勇敢なる信心で受け止め、厳然と勝ち越えてくることができたのです。

(『勝利の経典「御書」に学ぶ』第11巻99ページ)

◎御義口伝

難来るをもって安楽と意得べきなり。

(御書新版 1045 ページ・御書全集 750 ページ)